

スピノザの「自己」認識

——「自己」意識の三つの水準——

吉田健太郎

Kentaro YOSHIDA

社会科教育講座 (哲学)

1. はじめに

スピノザは『エチカ』2部定理29系で、「人間精神は事物を自然の共通の秩序 *ordo communis naturae* にしたがって知覚する場合には」自分自身について十全な *adaequata* 認識をもつことができず、「単に毀損し・混乱した *mutilata et confusa* 認識を有するのみである」という。しかしすぐそのあとの定理29備考では、「内部から決定される場合」には「精神はつねに事物を明晰判明に *clare et distincte* 観想する *contemplari*」として、自分自身について十全な認識が成り立ち得る可能性を示唆しているように思われる。以下の小論では、まず、人間精神に最初に与えられるという「身体の変状 *affectio corporis* の観念」の認識論的身分について概観した後、続く三つの節で、スピノザがいう人間的認識の三つの水準のそれぞれにおいて、「自己」認識がいかなるものとして理解されているかを考察していく。それらの考察を通じて、「自己を知るとはどういうことか」という問いに対するスピノザ特有の見解が確認されるだろう。

2. 「身体の変状の観念」の認識論的身分

人間も自然の一部である限り、外部からさまざまな影響を受けざるを得ない。それゆえ、人間精神はまず「身体の変状の観念」をもたざるを得ない。その意味で、それは人間精神が所有する「最初のもの」(2部定理11)である。ところで、この「身体の変状の観念」は、「人間身体の本性と同時に外部の物体の本性を部分的に含む」(2部定理16)観念である。いいかえるならば、それは、「身体の本性そのもの」も「外的物体の本性そのもの」も、非十全的 *inadaequata* (=部分的) にしか含まない観念である。したがって、「身体の変状の観念」は「認識の欠如 *privatio*」を含んだ観念であるとされる。

人間は自分の身体に限定された形でしか現実存在することはできない。ところで、存在する個物は、それ単独ではなく、そのものの外部に存在する他の多くの個物との力関係においてでしか、完全な仕方規定されることはできない。しかも、きわめて多くの仕方外部の個物から影響を受ける。それゆえ、人間精神が人間身体の観念として限定的である限りは、現実

存在する個物について、部分的(=非十全的)にしか知覚し得ないという原理的制約を受けている。逆に、「きわめて多くの個物の観念に変状した限りの神」のうちには、個物の十全な認識はないということになる。この点については、2部定理19で、スピノザ独特のいい回しによって、「人間精神がAを非十全に知覚する」とは、「神が人間精神と同時に他の事物の観念に変状している *afficitur* 限りにおいてAの観念をもつ」とことだといわれていた。

個物の現実存在や持続に関しては、われわれは「身体の変状の観念」に拠らずしては知覚することはできないわけだが、この「身体の変状の観念」それじたいに「認識の欠如」が含まれているゆえ、必然的に個物の現実存在や持続に関して非十全にしか知覚できないということになってしまう。いわば「二重の」原理的制約のもとに、われわれは置かれているのだ。

3. 精神自身(=自己)の認識とは

「思惟」は神の属性である(2部定理1)。また、神のうちには神の本性から必然的に生ずるあらゆる事物の観念が存在するから(2部定理3)、「思惟の変状(=様態)」の観念も神のうちに存在する。ところで、人間精神の本質は「思惟の諸様態(=観念)」から構成されている(2部定理11)。したがって、神は「人間精神(=観念)の観念」をもつ。

「観念(=精神)」と「観念の観念 *idea idae* (精神の観念)」は、同一の必然性をもって、同一の思惟能力から神のうちに生ずる(2部定理21)。つまり、神は「観念」だけではなく「観念の観念」をも必然的に有することになる。この観念についてのいわば反省的(=反射的)認識が、スピノザのいう精神の「自己」認識である。

ところで、神は、(人間身体と同時に)他の個物の観念に変状する限りにおいて、人間精神の観念をもつ。それゆえ、2部定理19で述べられた原則、すなわち「神が人間精神と同時に他の多くの事物の観念に変状している限りにおいてAの観念をもつ」とき、「人間精神はAを非十全に知覚する」という原則を、今の場合に適用するならば、「人間精神は人間精神(=自分自身)を十全に認識しない」ということが帰結する。神が人間精神の本質のみを構成する限りにおいては、人間精神

は自己自身について十全な認識を得ることができないというわけだ。

では、いま述べたことから、神の側からではなく人間精神の側から見るとどうなるか。まず、人間精神は「身体の変状の観念」のみならず「身体の変状の観念」の「観念」をもつ（2部定理22）。「観念」と「観念の観念」（＝観念の「形相 forma」）は同一の必然性をもって生じるのであったから、人間精神が身体の変状の観念をもつときには、同時に必ずその観念の観念をもたざるを得ない。ところで、人間精神は、この「身体の変状の観念の観念」をもつ限りにおいてのみ、自分自身を認識するとスピノザはいう。2部定理23を引用してみよう。

身体の変状の観念は、人間身体の本性を含む（この部の定理16より）。いいかえれば、それは（この部の定理13より）精神の本性と一致する。それゆえに、これらの観念の認識は、必然的に精神の認識を含む。ところが（前定理より）これらの観念の認識は、人間精神自身のなかにある。ゆえに、人間精神はその限りにおいてのみ自分自身を認識するのである。

ここでまず確認しておくべきことは、人間精神は、身体についての認識をもつ限りにおいてのみ、精神自身を認識するという点、そしてそれ以外の仕方では、すなわち身体の認識と無関係には、精神自身を認識することはできないという点である。スピノザの「自己」は、心身二元論という枠組みの中で理解されてはならないのはいうまでもないが、さらにまた、諸観念に存在論的・認識論的に先行する超越論的主観（主体）という仕方では理解されてもならない。スピノザが「身体の変状の観念の観念」という仕方では自己認識を規定するのは、それが身体の観念の「結果」でしかないという点を明確にするためでもある。身体の変状の観念のほうが、精神についての観念つまり自己認識に、先行するのである。

さて、この2部定理23の論証のポイントは、「人間身体（の本性）」と「人間精神（の本性）」は〈合一〉している（2部定理13）というスピノザ独特の反デカルト的原理に存する。延長の様態（つまり身体）とその様態の観念（つまり精神）とは、同一物を異なる仕方では表現しているまでのことで、両者の本性は「一致」しなければならない。

ところで、人間精神の現実的有を構成する最初のものは、現実存在する身体の観念であった（2部定理11・13）。この現実存在する身体は、つねに外部から影響を受けてさまざまな仕方では刺激されざるを得ないので、人間精神の現実的有を構成する最初の観念は、実際のところ、身体の変状の観念であることになろう。さて、身体の変状の観念は、（2部定理16より）「人間

身体の本性」を「部分的」に含む。したがって、（2部定理13より「人間身体の本性」と「人間精神の本性」は一致するので）身体の変状の観念は、「人間精神の本性」と「部分的」に一致し、それゆえにまた、「人間精神の本性」を「部分的」に含む。それゆえ、身体の変状の観念を知覚する（＝変状の観念の観念をもつ）ということは、人間精神を「部分的」に知覚することであり、人間精神は身体の変状を知覚する限りにおいてのみ、自分自身を「部分的」に認識するということになる。

いま2部定理23の論証を敷衍して、人間精神は自分自身を「部分的」に認識すると解釈したわけであるが、このことが後に2部定理29で述べられることにほかならない。「人間身体」の各々の変状の観念は、人間精神の十全な認識を含んでいない。われわれは事物を「自然の共通の秩序」にしたがって認識する場合、人間精神自身について「混乱し、毀損した」認識のみを有するというわけである。われわれは何よりもまず「身体の変状の観念」によって自己を知るしかなく、しかもその限りにおいては、混乱した形でしか自己を認識しないという原理的制約を受けているのである。「自然の共通の秩序」にしたがう限り、われわれは自己の身体や外部の物体の場合と同様に、自己自身についても、とりわけ現実的存在の「持続」に関わることからして、十全な認識をもつことができないというわけである。

ところで、スピノザにしたがうなら、われわれが「私」なる語で漠然と知覚している「自己」表象は、原理上、すべての身体の変状の観念に対して与えられているということになる。つまり、われわれはつねに、身体の変状の観念の観念という仕方では、自己を意識しているということが帰結する。もっとも、通常の用法からすれば、われわれはつねに自己を意識しているとは到底思われぬ。何らかの仕方では意識されているにしても、それはおそらく心理学でいうところの「無意識」の領域においてだと一般に解釈されることだろう。しかし、スピノザ自身は「無意識」なる概念をおそらく認めない。「人間精神を構成する対象（すなわち身体）のうちに生じるすべてのことは、人間精神によって知覚されていなければならない」（2部定理12）のであるし、「身体」と「身体の観念である精神」と「身体の観念の観念である自己認識」の三者がつねに同一の必然性から生じるのであれば、自己表象はつねに知覚されていなければならない。

さて、身体の変状の観念の観念は、「身体の本性と同時に外部物体の本性も含んだ観念」の観念である。したがって、身体の変状の観念が内在的に含んでいた非十全性を受け継いでいる。このことは、現に存在する「自己」は、つねに「他者」あるいは外部の物体との関係においてしか表象されないということを物語って

いると考えられよう。デカルト的「私」に対して、「私」とは「他者との相関物」でしかありえないとする他者論が近年かなり流行しているようであるが、スピノザがいう「身体の変状の観念の観念」としての「自己」認識という見解は、なぜ他者との関係なしに存在する「自己」がありえないのかを、そしてまた、そのような自己がなぜ他者の評価を気にせずにはいられないのか、他者との比較でしか自己を肯定することができないのかをかなり明確に、しかもいわば科学的に説明しているように思われる。「身体の変状の観念の観念」としての自己認識に内在する非十全性とは、自己の身体を刺激する外的事物の本性と「同時に」自己の本性を「部分的」にしか知覚しないという、「認識の欠如」のことにほかならない。それは外的事物との「同時存在性」「相互対照的存在性」とでも呼ぶべき特徴を示しているのである。

ところで、スピノザは「身体の変状の観念の観念」が非十全な認識を「含んでいる *involvere*」ことを認めているが、そのことが直ちにその観念の「誤謬 *error* (虚偽)」につながるわけではない。「身体の変状の観念の観念」は非十全な観念ではあるが、虚偽なる観念であるとはいわれていない。少なくとも、われわれは「身体の変状の観念の観念」という仕方以外では、現実に存在する「自己」について何ら知覚することができないのであるから、この観念それ自体を「誤謬」と評価したところで何ら得るところがあるわけではない。賢者は、自己について、この種の非十全的な表象をもたないのだ、とスピノザが考えているわけでは決していない。

とはいえ、「身体の変状の観念の観念」そのものが「認識の欠如」を内在すること、したがって混乱した（非十全な）認識を含むことを、認識しているか否かは、われわれの「自己」評価に重大な差異をもたらすであろう。「身体の変状の観念の観念」に含まれる「認識の欠如」に気づかず、また、いかなる原因によってその観念が生起するのかを何ら知ることもない場合には、容易に「自己」についての誤謬に誘い込まれてしまうだろう。すなわち、われわれは「自らの行動の原因を知らない」（2部定理35・3部定理2）場合には、「自己」を「自由原因 *causa libera*」として、いいかえるなら「実体」あるいは「自由なる主体」として理解するようになる。その結果が、自己自身についての過信、すなわち「高慢 *superbia*」というわけである。あるいはまた、自らを自由原因の主体であると見なしているの、自己の活動能力の「無力さ *impotentia*」の原因を自己自身にのみ帰属させ、その結果、「後悔 *poenitentia*」さらに悪化すれば「自己卑下 *abjectio*」に陥るとことになる。

われわれは非十全な観念に依拠する第一種の認識のみにしたがう限り、さまざまな偶然的出会い（事物と

の偶然的接触 *occursus fortuiti*=自然の共通の秩序）において、外部からさまざまな働きを受けるが、その原因を一度とて知ることなくさまざまな感情に翻弄されることになるだろう。そして自己の活動能力が阻害されていることを意識して、「ねたみ *invidia*」や「嫉妬 *zelotypia*」といった悲しみの感情に動かされる。この状態こそスピノザが「精神の弱さ」と呼ぶものである。ところで、われわれは自分と本性上類似したもの（=他者）からもっとも影響を受けやすい（4部定理29）。したがって「他者の活動と比較して自分の活動がより弱小であることを表象するとき」（3部定理55）悲しみを感じるであろう。またその結果、「個性」（=ほかならぬ私）なるものを、「他者から区別される特殊な事物をより多く所有している状態」と考えることになる。まさに、他者が所有しないことがらを自分が独占して所有していることを表象して喜びを感じるのが、われわれの自然本性というべきであろうか。それゆえ逆に、「自分と同等の者の徳（=能力）を悲しむ」という「ねたみ深さ」もまた、人間の自然本性に含まれているというべきなのだろう。

こうしたことから、われわれは（実体としての・自由意志の主体としての）確固たる「自我」を強烈に意識しているつもりでいながらも、その実、あるいはその反面、たえず自己を映し出す鏡¹でもある他者に影響されずにはいられない存在であることがよく分かる。

ところで、スピノザは、われわれは「身体の変状の観念の観念」が含む非十全性から完全に解放されることはないにしても、それでも何らかの仕方自己自身についてより明晰判明な認識をもつことができるようになると考えていた。第2部定理29備考でスピノザ自身が示唆するところによれば、精神は事物を「自然の共通の秩序」にしたがって知覚する場合、いいかえれば「外部から決定されて観想する」場合、同じことだが「事物の偶然的接触に基づいて個物を観想する」場合には、自分自身について混乱した認識しかもつことができないが、しかし、「内部から決定され、多くの事物を同時に観想する」場合には、明晰判明な認識をもち得るというのである。では、この内部から決定され明晰判明に知られる自己認識とは、いかなるものなのか。それは「自然の共通の秩序」にしたがう限りでの自己認識とどこが違うのか。もちろんその認識は、無限である限りの神が所有する厳密な意味での十全な認識とはいえないだろうが、それでも、第一種の認識における自己認識とは区別される何かであろう。

自己認識つまり精神についての認識は、身体についての認識と相即し、身体の認識の認識といういわば反省的・反射的な仕方では知られることができないのであるから、スピノザの「自己」認識の探求過程は、身体について可能な限り十全な認識を形成することと並行して進められていくことになる。既に2部定理29

の段階で、身体の変状の観念はそれじたい混乱して非十全であるにもかかわらず、そのうちに、外部の物体と「共通なるもの communis」を含む限りにおいて、十全な観念を何某か含んでいることが示唆されていた。したがって、われわれは「共通概念 notio communis」による認識を形成することによって、「自己」認識についても新たな水準に移行することができるのではないだろうかという期待をもつことができる。

4. 理性の働きの観想

身体の変状の観念はそれじたい非十全なものであり、その観念を通じて認識される身体・精神そのものの認識もまた非十全でしかないというのが前節までで確認されたことであった。問題は、それならば、われわれは身体の変状の観念から何某かの十全な認識を全く形成することができないのだろうか、その意味においては全く不可知論者であらざるを得ないのだろうか、という点である。

ところで、人間身体の変状の観念は、人間身体の本性と同時に外部の物体の本性を含む観念であるから、両者に共通する何らかの性質についてならば、十全に知ることができるのではないか。スピノザが「理性 ratio」認識（第二種の認識）と呼ぶのはこの種の「共通なるもの」の認識である²。

私の身体と他の身体が出会うときに、両者が何らかの点で互いに一致するならば、両者の間に好ましい関係の構成が構築されるであろう。この種の関係の構成は、最も一般性の低いレベルにおいては、たとえば栄養の摂取・吸収といった生理学的次元において現われるかもしれないし、最も一般性の高いレベルでなら、私の身体が偶然に出会うすべての物体と共有する「延長」という属性において現れるだろう。もっとも、ここで形成される共通概念が表現するものは、私の身体の「本質」・「固有性」ではない。「すべての事物に共通であり、等しく部分のなかにも全体のなかにもあるものは、けっして個物の本性を構成しない」(2部定理37)からである。

結局のところ、スピノザが理性認識(=十全な認識)と呼ぶのは、与えられた身体の変状をいわば機会にして「共通概念を構成する行為」であるということが出来るだろう。つまり、第二種の認識において精神は、より多くの共通概念を形成することに努め、より多くの一致点をもつよりよい関係構築に努め、事物をより広範囲のネットワークの中に位置付けようと努めることになる。スピノザにとって「(十全に)認識する」とは「よりよい関係の構築」なのだ。「内部から決定されて多くの事物を同時に観想することで、事物の一致点・相違点・対立点を認識するとき」(2部定理29)われわれは十全に認識する³。

さて、このような第二種の認識における「自己」認

識とはどのようなものだろうか。2部定理42・定理43をまず確認しておこう。

- ・真なるものと偽なるものとを区別することを教えるのは第一種の認識ではなくて、第二種および第三種の認識である。(2部定理42)
- ・真の観念を有する者は、同時に自分が真の観念を有することを知り、かつそのことの真理を疑うことができない。(2部定理43)
- ・真の観念を有する者は誰でも、真の観念が最高の確実性を含んでいることを知っている。(2部定理43備考)

真の観念を実際に(現実態として)もつ者のみが、自分が真理を認識していることを確実に知っている。2部定理42でいわれているように、真理と虚偽の区別は第二種あるいは第三種の認識すなわち十全な認識によってのみ明らかにされるわけであるから、それらの観念をもたずしては自らが真なる認識を行っていることは自覚されないというわけである。第一種の認識は、それ自身のうちに認識の欠如を含んでいるのであるから、われわれに真なる認識の自覚を与えることはできない。もっとも、われわれは往々にして第一種の認識による観念が事物を正確に表現しているものと誤って信じる傾向をもつ。そうだとすると、その場合は、われわれの自己認識、すなわち自分が有している観念が何を表現しているのかについての反省的認識が、実は正確ではなく誤りを含んでいるというわけだ。

スピノザがデカルト流的方法的懐疑を批判するのも、この文脈においてである。まさに真の観念を実際に所有する者は、自分が真の観念をもっていることを疑うことができないのである。もし、自らのもつ観念が真であるか否かについて、デカルトのごとく方法的懐疑を遂行するのであれば、その者は実際に真なる観念をもたない者、すなわち第二種あるいは第三種の認識ではなく認識の欠如を含む第一種の認識にしたがって事物の真偽を認識しようと努めている者にほかならない。スピノザにいわせれば、そのような者は、デカルトがいうような「自由意志」を強力に行使している者ではなく、せいぜい「事物を十全に知覚していることに自ら気づいていない」者ということになる。

ところで、2部定理43は、真理を観念とその対象の一致という「外的特徴 denominatio extrinseca」によって規定することへの批判、つまり「真理が真理自身の規範である」というスピノザの真理観を端的に示している箇所として有名であるが、われわれがいま問題にしている精神の自己認識との関連でいえば、「真理の保有者としての自覚」ないし「真理把握の反省的自覚」とでも呼ぶべき事態に対応していると考えてよいのではないか。この点に関しては、4部定理56のなか

でより詳しく言及されている。そこでは、有徳的 *virtus* な者こそが「自己」を最もよく知る者であることがいわれるのだが、議論の筋は以下のようになっている。

「有徳的に働く者」とは「理性」の導きにしがたって行動する者である。ところで、「理性」にしたがっている者は、自分が理性にしたがっていることを必ず（反省的に）「自己認識」していなければならない。なぜなら、（2部定理43でいわれていたように）事物を十全に認識する者は、自身が事物を十全に認識していることも同時に必ず知っているからである。「精神は、真のあるいは十全な観念を有するときに必然的に自己自身を観想する」（3部定理58）からである。一方、有徳的でない者は、自分では真理を把握していると考えているにしても、実は欺かれている可能性のほうが高い。したがって、有徳的な者こそが、「自己」すなわち「行動の規範としての自己（＝理性）」を最もよく知る者といえるのであって、これに対して有徳的でない者は、自己に対して無知であらざるを得ないということになる。

結局のところスピノザのいわんとすることは、「理性」の行使と「理性の行使の自覚」との間には、いわゆる認識論的ギャップは存在しないということのようである。そして、「そのときに限り」、精神は真理を「自覚」するのである。

第二種の認識において精神は、自己自身が真理を把握していることを必ず自覚していなければならないということが、いま明らかにされたわけだが、スピノザは5部前半で（この段階ではまだ知性認識が取り上げられていない）、同じく第二種の認識の水準において精神がなし得ることがらについて述べていた。それが、「精神の能力 *potentia*」・「感情に対する精神の力」の観想である。「精神が自己の感情を秩序付け、相互に連結し得るその秩序」（5部定理20備考）に、精神の感情に対する能力が存する。われわれの精神は「われわれの本性と相反する感情に囚われない」限りにおいて、すなわち外部の原因に妨げられず能動的である限りにおいて、自身の本性のみから可能な諸観念の演繹（連結）を産出する「能力」をもっている。もちろんこの「能力」は「理性」の力のことと理解して問題はなかろう。だとすれば、「理性」の行使と「理性の行使の自覚」との間には認識論的ギャップが存在しないのであるから、精神は自身の「能力」じたいも知覚していなければならないことになろう。そしてこの自己反省的知覚が、無限である限りの神のごとく絶対的ではないにしても可能な限り最高の完全性を有する、「精神の力」の反省的認識（＝自己認識）ということになろう。

ところで、精神は自己自身を観想するときに「喜び」を感じる（3部定理58）。とりわけ十全な観念をもつ場合すなわち「働きをなす限りにおいて」抱く感情は、非十全な観念を原因とする受動的感情とは区別される

能動的感情である。それゆえ、精神自身の活動能力を十全に認識することから、「存在しうる最高の満足」（4部定理52）が生ずる。また、理性から生ずる欲望（たとえば道義心 *pietas* や端正心 *honestas*）は、受動的感情が「われわれの能力と比較された外部の原因の力によって規定され」（4部定理5）過度になりやすいのに反して、過度になることはありえない。実に、理性の導きにしがたう者のみが、「自己以外の何びとにもしたがわず、また人生において最も重大であると認識することがら、そしてそのために自己の最も欲することながら、のみを為す（4部定理66備考）」ことになる。スピノザは、このような存在様態をもつ人間を「自由人 *homo liber*」・「強い精神の持ち主」と呼んでいる。

第二種の認識において問題となる精神の自己認識は、他者との「差異」によって特殊化された「自己」なるものについての認識（＝第一種の認識）ではない。精神は、自分が「真理」の認識に参画していることを、それゆえ「真理」の体现者であることを、まず自覚しているのであり、そして次に、外部の原因によって阻害されることなく自らの本質のみから為し得る自身の能力を、可能な限り明晰判明に観想しているのである。ここでは「真理」あるいは「能力」そのものの観想が問題なのであって、その所有主体の在り処（＝それを「誰が」所有しているのか）が問われているわけではない。つまり、ここで問われているのは「ほかならぬ私」としての「自己」ではないということだ。もちろん、他者や外的事物との相対的比較が要求されているわけでもない。十全な観念を現実にも所有するとき、すなわち自らが現実に理性にしたがって活動している限りにおいてのみ、それらの活動そのものが「自覚」されるのであって、それ以外の仕方でも、またそれ以外のことがらで、認識されるわけではないということだ。まさに、「理性」が認識するのを「理性」自身が自己反省的に把握しているのだといえよう。第二種の認識における「自己」認識は、それゆえ、非人称的な精神自身の活動の自覚（＝「理性」の自覚）といえよう。

ところで、第二種の認識における「自己」認識をスピノザが問題としているときでも、第一種の認識における「自己」認識の存在じたいが否定されたわけではないという点を確認しておかねばならない。第一種の認識と第二種の認識の関係を確認しておこう。第二種の認識によっていわば「乗り越えられねばならない」ものとして、いいかえるなら、第二種の認識を形成すれば以後は、そのような非十全的な自己認識の出現が阻止できるかのごとく、第一種の自己認識の存在ないし存在価値そのものが否定されているわけではない。

そもそも第二種の認識は、事物を「永遠の相のもとに *sub aeternitatis specie*」すなわち「必然」として観想するのであって、「表象力 *imaginatio* の秩序」にしたがって事物を「持続の相のもとに」表象する認識

からは区別される。だとすれば、そこでは、「想起 memoria」という思惟様態(=「過去」という時間表象)が存在する余地はなくなる。要するに、第二種の認識においては、「過去」あるいは「未来」という時間表象が成立する余地がないということだ。いってみればすべては「現在」において生起する。よって、むしろ非時間的であるというべきかもしれない。したがって、第二種の認識において「自己」認識が問題になるにしても、それは当然のことながら、第一種の認識で問題となった「自己」認識とは別物であるし、それらは互いに対立・矛盾する関係にあるのでもない。両者は別の水準にある。一方は、他者との差別化においてよりクローズアップされてくる「自我」が登場する領域であり、「過去」と「未来」という二つの時間表象と共に「自己」を表象せざるを得ない運命にある。他方は、すべての事物を「現在」における必然的連関のもとに描写する、自然科学に代表される「真理」の領域であり、そこでは、もはや通常の意味での「私」なるものが場所をもたないのは当然のことである。

したがって、スピノザが精神の自己認識に関して、第一種の認識と第二種の認識とを区別したからといって、そのことがただちに、第一種の自己認識が「虚偽」なる自己認識であるということを主張するものではない。スピノザのねらいは、なによりもまず、精神の活動の受動・能動という二つのタイプを区別すること、そこにおいていかなる精神自身の認識(=自己認識)が観想されるかを確認することにある。それゆえ「自己」認識に関してわれわれに期待されていることは、いわば基体的存在としての根源的主体なる意味で理解された「本来の自己」について語ることではない(実のところ、そのようなものは単なる幻想でしかありえないであろう)。精神(自己)について、単に第一種の認識という不完全な水準だけではなく、それとは別のより明晰判明な第二種あるいは次に述べる第三種の認識の水準によっても「自己」を知ること、より多くの水準で「自己」を知ることが問題なのだ。そしてまた、そのことを通じて、相対的に第一種の認識が占める割合を減らすことで、「自己」が外部から影響されることがより少なくなることが目指されていたのである。

5. 知性の働きの観想としての自己認識

第三種の認識(=知性認識 intellectus)とは何か。スピノザはそれを「神の諸属性の形相的本質の十全な観念から事物の本質の十全な観念へ進む」(2部定理40備考2)認識であると定義している。この第三種の認識は「直観的認識 scientia intuitiva」ともいいかえられており、第二種の認識が「普遍的認識」であるのに対して、「個物」の本質に関わる認識であるとされている。では、「共通概念」ではなく事物の「本質」はいかにして知られるというのであろうか。

5部定理22でスピノザは、「神の中には個々の人間身体の本質を永遠の相のもとに表現する観念が必然的に存在する」と述べている。論証の筋は以下の通りである。(1部定理16でいわれたように)神の本性の必然性から必然的に、無限知性によって把握されるすべてのものが生じなければならない。いいかえるなら、神の本性の中には、無限知性によって把握されるすべてのものが必然的に存在する。それゆえ、「個々の人間身体の本質の観念」も必然的に神のなかに存在しなければならない。しかも、無限知性は、特定の時間および場所に関係して事物の存在を捉える「持続の相のもと」ではなく、「永遠の相のもと」に事物を認識するのであるから、神の中には必然的に人間身体の本質を「永遠の相のもと」に表現する観念が存在する。

ところで、問題は、神(=無限知性)が人間身体の本質の十全な観念をもっていることは認めるとしても、有限である人間精神がそのような本質の観念を「十全に」認識することが可能なのかという点である。人間精神が無限知性の一部分である限り、人間身体そのものについて十全な認識をもつことはできないという原理的制約を、すでに確認したのではなかったか。なるほど「身体の変状の観念」に含まれる認識の欠如が、われわれから人間身体そのものの十全な認識の所有を阻んでいるにしても、身体の変状の観念に含まれる「共通なるもの」については、十全な認識をもつことができた。しかしこの「共通なるもの」は、身体の「本質」そのものを表現しているのではない(2部定理37)。

そうだとすれば、われわれは人間身体の「本質」について、一般に個物の「本質」について、十全な認識をもつことはできないというべきなのだろうか。もし事態がそうだとすれば、スピノザが定義する第三種の認識そのものが、われわれ人間精神にとっては手に入れることのできないものになってしまうが、果たしてそうなのか。われわれとしてはこの点をどう解釈すべきであろうか。問題は、どうやら、個別的本質について、第一種の認識によるものとも共通概念によるものとも違った仕方では、十全な認識をもつことができるのかどうかということになりそうである。

そもそも事物の「本質」とは何か。スピノザはどう考えていたのかをまず確認しておかねばならない。スピノザは「本質」を「それが与えられればあるものが必然的に定立される」(2部定義2)ものと簡潔に定義しているが、これは事物を規定する「一般性」概念のことではなく、事物をひとつの固有なものに「合一」している「力」・「活動能力」・「自己保存に努める努力 conatus」のことである。ところで、これらの「力」は、現実には外部からさまざまな影響を受けざるを得ないという制約があるため、「自然の共通の秩序」にしたがう限りつねに外部の力によって限定されざるを得ないわけである。したがって、その限りにおいては、(自己

の身体に限定されている) 人間精神は、事物の本性の力そのものを十全に認識することができないといわれる。

しかし、いわば内部から規定されるような仕方です。すなわち外部の事物との関係から離れてそれ自身の本性の力によって規定されるような仕方です。事物の力を認識することは全く不可能であったかといえ、実はそうではなかったことをわれわれは思い返す必要があらう。というのも、なるほど共通概念による第二種の認識は、事物における「共通なるもの」の知覚であってその限りでは事物の本質を構成するものの認識ではありえない。しかし、既に述べたように、理性の働きを観想という仕方です。われわれは「われわれの本性と相反する感情に囚われない限りで」精神(=自己)の力を明晰判明に認識したのであった。もちろん、われわれの能力はきわめて制限されていて、「外部の原因の力によって無限に凌駕される」(4部定理3)ため、われわれは「絶対的な力」をもつことはできないものの、しかしながら、十全な認識を有する限りにおいて、「少なくとも部分的には」われわれ自身の本性のみによって規定されるようなことがらを産出する能力をもつことが可能であり、それゆえ必然的にその能力を認識することができたのである。

さて、ここまでは専ら「精神の力」の認識のみが語られ、まだ身体の力・本質の認識には触れずじまいであった。われわれの問題の出発点は、身体の本質(=力)の認識であったが、この「身体の力」の認識と「精神の力」の認識とはどのように関係するのだろうか。ここで両者をつなぐのは「2部定理13備考」であろう。そこでは、既に述べたように、精神が身体と「合一」していること、したがって本性が「一致」していることがいわれていた。それゆえ、いま「精神の力」について把握されたことは、「身体の力」についても同様に認められなければならないことになる。精神の力は身体の力の反映であり、その逆もまた然りである。しかも、ここで「精神の力」に対応する「身体の力」とは、いわば外部の諸原因から分離されて内部のみから規定されるような、その意味では純粋に能動的な「力」でなければならない。外部の力に阻害されることなく、精神の本質のみから考えられるような「十全な」認識を遂行することによって、同時に、理性の働きそのものを観想することが、精神の力の観想すなわち精神の本質の明晰判明な認識であった。そしていま、そのような「精神の力」の対応物として必然的に、「身体の力」が知覚されると考えるべきではないだろうか。ここで重要なことは、内的に規定される、身体の本質に属する部分としての「身体の力」がわれわれに十全に認識されるのは、今述べたような仕方以外ではありえないという点である。外部の原因によるのではなく、それ自身の本性の必然性のみによって規定されるような

「身体の力」は、つねに「精神の力」の把握と対応する形でしか認識されないのである。われわれが通常感じている身体感覚は、もちろん第一種の認識によるものであるが、それは身体を刺激する外部の物体の本性も同時に含んでいるため、それ自身の本性の力そのものを十全に表現することはできないのであった。したがって、われわれは自身の身体に固有な自己肯定的能力(=自己の身体の本質に属するもののみによって規定される力)を、われわれに直接与えられる身体の変状の観念によって知ることはできず、つねに、われわれに固有な「精神の力」の認識(=理性の働きの観想)を通じていわば反射的に知ることになるだろうか。

精神の力(=本質)や身体の力(=本質)がどのようにして明晰判明に知られるのかについては、以上でおおよそ説明されたとしよう。ところで、自己の身体の本質を明晰判明に認識することが即、第三種の認識というわけではない。第三種の認識の何よりもの特徴は、「神(の本質)」との関係において事物を認識することにある。すなわち、事物の本質(=力)が、神の本質(=力)の表現である属性を、「ある一定の仕方」で表現していることを知ることにある。いいかえるなら、事物の本質が神の無限なる本質の一部分であることの直観とでもいえばよいだろうか。では、この第三種の認識の反省的認識である「自己」認識について次に考えてみよう。

知性の働きの観想としての「自己」認識は、次のような仕方です。成立するものと思われる。まず、「神の本質の十全な観念」を原因として必然的に「身体の本質の十全な観念」が結果することの把握がある。もちろんこれが「神の属性の十全な観念から事物の本質の十全な観念に進む」という第三種の認識である。第二に、第三種の認識において、「身体の本質」は、「神の本質そのものを通してある永遠なる必然性によって考えられる」のであるから、それ自身永遠なるものでなければならないという把握がある。第三に、身体の本質と精神の本質は一致するという2部定理13の原則の把握がある。それゆえ帰結として、精神の本質に属する「知性」自身もまた永遠でなければならないという把握に至る。この最後の帰結が、知性の働きの観想によって知られる精神自身の永遠性である。

ところで、第三種の認識は、事物の個的本質が「神の本質そのものを原因として」必然的に与えられたものであるという直観において成り立つものであり、その意味においてまさに「個物」の認識に関わる(5部定理36)のであるから、精神の「自己」認識に関しても、第二種の認識の水準では問題となることのなかった、精神の「個性性」の自覚とでもいべき認識が、第一種の認識の場合とは別の様相で、自覚されているのでなければならない。第一種の認識の場合、つねに外部の物体あるいは他者の本性を含んだ形でしか自己

の本性が規定されなかったので、他者のいわば鏡像としての自己という側面から原理的に脱け出すことは不可能であった。それゆえその反面、もしそうした状況に自分が必然的に置かれていることを反省することがなければ、他者の否定としての「ほかならぬ私」を意識することが、まさに自分自身の「個性」を認識することだと信じる傾向が生まれてくるのを容易に理解することができる。この傾向の行き着く先が、「自由意志の主体」としての自己、自己原因としての「根源的自我」などと伝統的に呼ばれてきた「自己」理解の枠組みではないだろうか。おそらくこうした自己理解の枠組みの提唱者は、もともと自己の本性と同時に他者の本性も含む「身体の変状の観念」の認識論的身分を誤解していたか、それとも、意図的にこの「認識の欠如」から目を背け、純粹自我なる理念に身を寄せたのか、いずれかであろう。実際、彼らにしても純粹自我なる理念は「事実」問題として存在するのではなく、「権利」問題として要請せざるを得ないというしかなかった。

また、前述したように、われわれは他者との差異化によって自己の「個性」を認識する傾向にあるので、より「個性的」になるために、他者とは違った特殊性を追求することに駆られて「自由競争」に参入する。しかしここで競われる「個性」なるものは、つねに他者からの「外部評価」によって規定されざるを得ないという悲しい性をもち合わせているため、さまざまな受動的・否定的感情に刺激されることになる。人間の「ねたみ深さ」という自然本性は、その顕著な例といえるだろう。

では、こうした第一種の認識に由来する「自己」認識と、スピノザが第三種の認識の観想として捉えた「自己」認識とは、どこが違うのか。簡潔にいうなら、第三種の認識における「個別性」は、他の個物との相対的比較において確認されるのではなく、神の本質を「ある一定の仕方⁵⁾」で表現していることを認識する限りにおいて確認されるということだ。いいかえるなら、神の属性を「ある一定の仕方」で表現している「様態に変状している」ことの自覚＝直観を通じてしか、個別性が把握されないということでもある。スピノザが知性の反省的認識という仕方⁶⁾で捉えた「自己」の「個性」は、なんと神との関係においてのみ、神（＝自然）のうちに存在する「ひとつの実有 *entia realia*」であることの直観として、十全に把握されるのである。神との関係においてのみ、自らの本性の力のみによって必然的に活動する自己の存在様態が、それとして明晰判明に直観されるということなのだろう。5部定理32から定理37にかけて言及されている「神への知的愛 *amor dei intellectualis*」とは、まさにこの文脈でのみ理解されるべきである。すなわち、スピノザのいう「神への知的愛」とは、「精神が原因としての神の観念を伴いながら自己自身を観想する働き」（5部定理36）のこ

とにほかならない。それゆえ、こうしたことを踏まえるならば、「自分自身（＝自己）を（十全に）知る」とは、少なくともスピノザが問題にした第三種の認識の水準においていうならば、通常われわれが理解しているような「自己実現」という意味ではなく、神の本質を「ある一定の仕方⁷⁾」で表現している「神の一部分であること」の自覚、「われわれのよりよき部分」が「全自然の秩序と一致する」（4部付録32項）ことの自覚、という意味で理解されなければならないことが分かる。この水準では、「個性的」であることで外部との間に摩擦・対立・相互否定的関係が生じることなどない。すべての事物は、「神を原因とする」という点において、いわば「神の自己表現」であるという点において、互いに「一致」せざるを得ないのだから。

永遠性について少し補足しておこう⁸⁾。スピノザのいう「永遠」は、われわれが通常イメージするような「時間的永続性」を意味するわけではない。スピノザは「永遠」を、事物の存在様式の一つと理解するが、それは時間的持続によって規定されるような存在様式ではない。無限である限りの神の存在様式は「永遠」以外にはありえないが、このことは、神が時間的に永続的持続性を有していることによるのではない。したがって、われわれのとるある存在様式が、時間的持続という観点からすれば限定されていたとしても、そのことは何らその存在様式が「永遠」であることを妨げるものではない。われわれの「知性活動」の現実的行使という存在様式が、たとえ時間的に永続的ではなく断続的ではなかったとしても、「知性活動」という存在様式そのものが「永遠」でなくなるわけではない。知性活動を現実に行使することによって、受動的感情すなわちわれわれの本性に相反するような感情からの影響を相対的に減少させ、それに応じて、自らの本性の力のみによって規定されるような存在様態に入ることが、われわれ人間にとって唯一可能な「永遠」との出会いというわけだ。

6. 結語

スピノザのいう、明晰判明に「自己」を知るとはいかなることなのか。俗にいう自らのアイデンティティの所在を突き止める作業ではないようである。社会的役割・社会的特性といった視点から語られる「自己」でもない。また、「個性尊重」やら「個性重視」といった教育的言説のなかで頻繁に繰り返される「個性」なるものでもない。もちろん、「自己実現」・「自己責任」といった最近よく耳にするフレーズの中で問題となる「自己」でもなかろう。では何なのか。

いま上であげた例は、すべてスピノザのいう第一種の認識の水準で問題となる「自己」認識である。その限りにおいては、「自己」は必ず「他者」との関わりから離脱することはできないという特性をもつ。この意

味での「自己」は、時間的(=歴史的)かつ空間的(=地理的)に限定されたある社会的公共空間の内部でしか意味をもたない概念である、とさえいえることができるかもしれない。いわゆるデカルト的自我が批判されるのもこの文脈においてであろう。また、現象学的心灵学で問題となる「自他未分化」なる概念にしても、自己の身体の本性と同時に外部の身体の本性をそれぞれ部分的に含んでいる、という身体の変状の観念が有する認識論的身分をいいかえたとすぎない。さらにまた、超越論哲学が問題にしてきた「超越論的自我」なる概念にしても、スピノザにいわせれば、第一種の認識に含まれる認識の欠如に由来する誤謬概念であった。

それでは、スピノザが第二種・第三種の認識の水準で問題にする「自己」とは一体いかなるものか。「自己」を明晰判明に認識することは即、世界を十全に認識することであり、神を十全に認識することである。他者ないし外部とより多くの「共通なるもの」を見出すことに「自己」(=精神)は喜びを見出す。他者ではなく「ほかならぬ私」を探し当てることが問題となっているのではない。「永遠の相のもとに見られた私」を認識することが問題なのだ。

これまでも多くの解釈者たちが指摘したように、いかにも神秘主義思想家というスピノザ像がここから連想されるかもしれない。幾何学的秩序にしたがって論証されたはずの「エチカ」も、最終段階に至って、もはや哲学ではなく宗教・神学に足を踏み入れてしまったと糾弾されるかもしれない。しかしスピノザにいわせれば、真の宗教・神学はいわゆる「善・悪」なる価値を超えたものでなければならない。その意味において、それらは真の科学と同様に、事物を「必然として観想すること」に努めるのである。なお、「自己」意識の三つの水準という小論の副題から、一方では西洋哲学におけるキルケゴールの「実存の三段階論」、他方では東洋哲学における西田幾多郎の「宗教的要求としての自己の発展完成」、との異同が問われようが、その点についての考察は今後の課題としたい。

最後に、「エチカ」最終定理(5部定理42備考)で、無知者とは区別される賢者についてスピノザが述べる箇所を引用してこの小論の締めくくりとしよう。

賢者は、賢者として見られるかぎり、ほとんど心を乱されることがなく、自己・神および事物のある永遠の必然性によって意識し、決して存在することをやめず、つねに精神の真の満足を享有している。

註

スピノザのテキストは *Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, 1925. に拠る。なお邦訳は畠中尚志訳「エチカ」(岩波文庫)を使用した。ただし読点の使用法、漢字の表記を一部変更した箇所がある。

- 1 上野修『精神の眼は論証そのもの』学樹書院, 1999. 第5章「われらに似たるもの—スピノザによる想像的自我およびその分身と欲望—」とりわけ127ページから136ページにかけての叙述は大変参考になった。「シミュラクルとでもいうべき他者の鏡像」という表現が129ページに出てくる。
- 2 A. マトゥロンによれば、「さまざまな色の球がたがいに隣接して一つの袋のなかにおさまっているような具合」に互いに別々のものとして、十全な観念と非十全な観念が精神のうちに存在するのではない。重要なことは「すべての非十全な観念のなかには十全な観念がある」というスピノザの共通概念の理論を理解することである。「スピノザにおける永遠の生と身体」(桜井直文訳『現代思想』臨時増刊号第24巻第14号, 青土社, 1996. pp.199-200)
- 3 この辺りの叙述の作成には浅野俊哉「スピノザと〈成熟〉の主題—十全性と理性の意味をめぐる—」(『現代思想』同上 pp.290-292)が大変参考になった。
- 4 須藤訓任は「『現実的』であるとは何を意味するか—スピノザの「自己」—」(『思想』2003年第6号, 岩波書店)で「ほかならぬこの「わたし」という個体固有の能動性ではなく、普遍的で匿名的な存在, 誰でもなく誰であってもよい存在の能動性」(p.106)という表現を当てている。
- 5 「一定の仕方」とは物体の場合、「運動と静止の一定の割合」を意味している。事物の本質とは、その個体の構成部分の各々の運動を「ある一定の割合で」相互に伝達するように結び付けている「合一」の「力」である。2部定理13の後に出てくる定義および補助定理を参照のこと。オルデンブルク宛書簡32も参照のこと。
- 6 5部定理23以下のいわゆる「精神の永遠性」をめぐる問題に関しては、Steven Parchment “The Mind's Eternity in Spinoza's *Ethics*” in *Journal of the History of Philosophy*, 38: 3, July 2000. pp.349-383 が諸解釈をコンパクトに纏めていて参考になった。

(平成15年9月9日受理)